

木戸城回顧

高木嘉吉

(顧問・佐伯市藤原区)

今十三重の塔の立っている所が、昔の木戸城の跡である。十三重の塔は、昔は小高い丘の上にあつて、遠方からもよく望見されたものである。十三重であるから十三重の塔ということに異論はないが、古人は九仞くじゅうじんの塔といつたものである。一仞じんは八尺で、九仞は高いことを意味する。九仞がいつの間にか九仞くじゅうじんとなまり、九重くじゅうとなまつて、九重の塔と言われるようになった。九重の塔は、鶴岡人にとっては懐しい名前である。

昔は、古市の入口に石段があつて、それを登ると、三畝ばかりの広場があり、広場の中央に九重の塔が立っていた。

此の塔の建立者についても色々論議が交わされているが、私は佐伯氏の九代惟治だと思つている。惟治が子供の千代鶴の病弱を憂えて、その健康祈願のため、此の塔

を建てたという説に賛同するものである。惟治が、祖母嶽大明神を勧請したのも同じ所で、九重の塔の広場の近くにその跡が残っていた。此の建物は、後世曳地の愛宕神社に転用されて、今は礎石だけしか残っていない。

この丘は、上岡の本郷部落から東にのびたものであるが、本郷と八戸部落との間に深い堀割がある。今両部落間の通路に利用されているが、庶民が堀割つたものではない。木戸城を佐伯氏の聖域と考えた惟治が、その境界を示すために堀割つたものであろう。

丘の南側には、木戸の瀬川が流れていた。番匠川が、堤防のないまゝ勝手に上岡の平野を流れていたが、その一つであろう。

瀬上り脇指の伝説がある。佐伯惟勝が、釜門かまどに遊んだ時、その脇指が鞘走つて海中に落ちた。海士を入れて捜

したが発見出来なかった。其の後、木戸の瀬迄上り、夜な夜な光り物となる。人恐れて此の瀬を渡る者なし。惟勝龍護寺参詣の為此の瀬を渡る時、水底がしきりに光ったので、人を入れて捜がさせたら脇指があった。先年、釜門で失ったもので、蟻がらがついていたが少しもさびず、もとの通りに光っていた。こんな話が言い伝えられ信ぜられた良い時代であった。

現在でも梅雨時、台風時に大雨が降ると、木戸の瀬川は忽ち本流となって、山裾を洗って流れる。

再言する。木戸城は城郭ではなく聖域であった。



表紙解説

修験の磨崖仏楮本

宇佐郡安心院町

向って中央よりやや左上部に「応永三十五年」の墨書銘がかすかに読みとれる。約五百七十年の長い歲月風雨にさらされ消えなかった。

昔は照葉樹林に秘匿され、陽の目も見ない幽玄の地であり、また、密教寺の修法祈禱場、異様な磨崖仏群像周辺の人達もあまり近づかなかったのではなかったか。

写真は、ほぼ中央に見られる不動明王。

写真並びに説明 軸丸 勇